銭形平次捕物控

二枚の小判

野村胡堂

青空文庫

一

「親分の前だが――」

ガラツ八の八五郎は、何やらニヤニヤとしてをります。

「前だか後ろだか知らないが、人の顔を見て、思ひ出し笑ひをするのは罪が深いぜ。何を一體思ひ詰めたんだ」

錢形の平次は相變らずこんな調子でした。年を取つても貧乏しても氣の若さと洒落氣には何んの變りもありません。

「ね、親分の前だが、褒美を貰つたら何に費はうか、あつしはそれを考へて居るんで」

「褒美？」

「忘れちやいけませんよ。近頃御府内にチヨイチヨイ贋金が現はれるんで、その犯人を擧げた者には、大層な御褒美を下さるといふ御觸れぢやありませんか」

「なんだその事か、――そいつは取らぬ狸の皮算用だ。當てにしない方が無事だらうぜ」

「でも、萬一といふことがあるでせう。あつしがその僞金造りを捕へたら、どうなるでせう、親分」

「大層な氣組だが、――まア諦める方が無事だらうよ。半年越し江戸中の岡つ引が、鵜の目鷹

の目で探しても、尻尾をつかませない相手だ」
「でも――」
「萬一なんてことがあるものか、谷中の富籤ぢやあるまいし」
「谷中の富籤ほども分がありませんかね、親分」
「まア、そんな事だらうよ」
錢形の平次が締めてゐるほど、その贋金造ひは巧妙を極めました。
その頃横行した贋金といふのは、所謂銅脈といつた種類で、銅の臺に巧みな金鍍金をほどこした細工物で、素人目には眞物の小判と鑑別がつかなかつたばかりでなく、贋造貨幣犯人の一番むづかしい使用法が巧妙で、江戸中の恐怖になりながらも、容易にその根源を探らせなかつたのです。
「あの――」
そんな夢のやうな事を話してゐるガラツ八の後ろへ、平次の女房のお靜はそつと顏を出しました。相變らず若くて内氣で可愛らしい女房ぶりです。
「何んだ」
「お客樣ですが――」
「お客樣？　どなただ」
「それがわかりません。眞つ蒼になつて顫へて居るやうですが」

「お勝手か」

「え」

平次は默つて立ち上がると、女房を掻きのけるやうに、お勝手へ顏を出しました。其處には誰も居ません。

二月の町は宵乍ら冴え返つて、戸をあけたまゝのお勝手の土間に、冷たい月の光が一パイに射してゐる中には、お靜の言ふ眞つ蒼になつて顫へてゐるお客は愚か、顏馴染の野良犬も來てはゐなかつたのです。

「八」

「ヘエ」

たつたそれだけの號令で、八五郎は疾風のやうに馳け出しました。贋金造りを縛つた褒美で、三浦屋の高尾の身請でもするやうな氣でゐる空想家のガラツ八ですが、一面にはまた錢形平次の助手として、辛辣極まる實際的な鬪士でもあつたのです。

間もなく路地一パイの騷ぎを展開し乍ら、八五郎は一人の若い男を引摺るやうにして戻つて來ました。

「此野郎、逃げようたつて逃がすものか。さア、眞つ直ぐに歩け」

「行きますよ、親分、——逃げも隱れもしません。どうせ錢形の親分にお願ひするつもりで來たんですもの」

「何を言やがる、――そんなら逃げるわけはないぢやないか」

八五郎に小突かれながら來るのは、二十三四のめくら縞の半纏を着た、小柄で、色の黒い、小商人風の男でした。

「八、何といふ騒ぎだ。御近所の衆がびつくりするぢやないか」

平次は見兼ねて戸口から聲を掛けます。一國者の八五郎は、お勝手を覗いて逃げ出したといふ男を、縛り上げ兼ねない見幕だつたのです。

二

「一體何うしたといふんだ。――お前さんはお勝手を覗いて、俺に逢ひ度いと言つたんだらう」

「へエ」

「それが急に逃げ出すからこんな騒ぎになるぢやないか」

若い男を家の中に入れると、錢形の平次は打ち解けた調子で斯う問ひ進むのでした。

「相濟みません。――私は急に怖くなりましたんで、へエ――」

若い男は漸く口を開きました。

「何が怖かつたんだ。俺はそんな怖い顔をした覺えはないが――」

平次はツイ破顔一笑します。まだ三十を越したばかり、につこりすると飛んだ愛嬌のある平

次の顔が、脅え切つた相手の男の心持を柔げたやうでもあります。

「――なまじつか、私が言ひさへしなければ、誰も知る筈のないことを、面喰つて餘計なことを言つて、巻き添へになるのが恐ろしうございます」

「何んの巻添へなんだ。――正直に話したらお前さんの迷惑になるやうにはしない。詳しく話して見るが宜い」

「染吉が殺されてゐたんで、ヘエ――、驚いたの驚かないのつて――」

突然そんな事を言つて、若い男はそつと後ろを見廻します。

「染吉が殺された？」

このあわてた男の口から、事件の實相をつかみ出すのは、錢形の平次にしても、容易ならぬ仕事でした。

この男は勇太郎といふ湯島のさゝやかな炭屋の亭主で、幼な友達の染吉といふのと、今日の夕刻妻戀稲荷様の前でハタと逢ひ、暫らくその前の空つぽの茶店の縁臺で話して別れたが、家へ歸つてフト商賣用の秤を忘れて來たことを思ひ出し、稲荷様の茶店まで引返して見ると、染吉は縁臺に腰を下ろしたまゝ、頭を打ち割られて、血だらけになつて死んでゐたといふのです。

「――驚いて錢形の親分さんのところまで飛んで來ました。錢形の親分さんなら、染吉を殺した本當の下手人をわけもなく見付けて下さるだらうと思つたからで御座います。お勝手口から覗いて、お神さんに取次は頼みましたが、――考へて見ると、私と染吉が妻戀稲荷様前の縁臺

で暫らく話して居たのを、お月様の外には誰も見たわけではなく、此まゝ默つてゐさへすれば、私は何んの關係もない人間で涼しい顏をして居られます。面喰つて餘計なことを申上げ、卷添を喰ふのは馬鹿々々しいことだと思つて、急に逃げ出す氣になりました」

若い男――炭屋の勇太郎は、ガタガタ顫へ乍ら漸くこれだけの事を話したのです。

「それつ切りか」

ガラツ八は後ろから少し荒つぽい聲を掛けました。

「それつ切りでございます。尤も、私の秤は死骸の傍にも見えませんでした。あわてて何處かへ振り落したのでございませう」

「染吉と、どんな話をしたんだ。――そいつを聽かう。――いや、どうせ現場へ行くんだから歩き乍らの方が宜い」

平次は手早く仕度をして飛出すと、大根畑への道を急ぎ乍ら、勇太郎の答へを促しました。

「いろ〳〵意見を申しました」

「意見といふと？」

「染吉と私は湯島に生れて湯島に育つて、本當の幼な友達で御座います。私は此通り分別も工夫もない人間で、親讓りの小さい炭屋を、後生大事に守つて居りますが、染吉は働き者で派手好きで、親讓りの縫箔屋を嫌ひ、色々儲かり相な仕事に手を出して、派手な暮しをして居りましたが、その爲に内輪が苦しくなるばかりで、近頃はひどい借金に惱んで居りました。久し振

りで逢つた幼馴染の私は、自分の廻らない智恵も忘れて、ツイ意見がましい事も申したわけでございます」

「フム」

「すると染吉は、近頃いろ〳〵考へた末、危い商賣とフツツリ縁を切つて、本當に堅氣になるつもりだから安心してくれと申します。私は――儲けるより溜める方が早い――といふと染吉は『俺も今になつてつく〳〵〳〵悟つた。――いづれ錢形の親分のところへでも行つて、詳しく申上げ、惡い事から足を洗ひたいが、お前は錢形の親分を知つて居るなら一緒につれて行つてくれ――』と斯う申して居りました」

「それから」

「一度は薄情な仕打もした許嫁のお芳にも、今晩は逢つて心から詫をするつもりだ。長い間惡い夢を見たが、お芳はこの染吉を勘辨してくれるか知ら？――と染吉はそんな事を言つて居りました」

「お芳といふのは？」

「妻戀坂の荒物屋の娘で、染吉の許嫁で御座いました」

さう言ふ勇太郎の調子には、言ふに言はれぬ深い感情のあるのを、平次は見逃さなかつたのです。

「お前とは關係がないのか」

「飛んでもない　親分さん、私などが――」

パツと赤くなる勇太郎の初心さは、この三人の關係の並々でなかつたことを白状してゐるやうでもあります。

三

妻戀稻荷の前の茶店――晝は婆さんが一人今戸燒の狸のやうに番人をして居りますが、日が暮れると自分の家へ引揚げて、莫蓙や毛氈を剥いだまゝの縁臺が、淋しく取殘されてゐるところに、染吉の死骸が月の光に照らされて、淺ましく横たはつて居るのでした。

往來から少し離れてゐるので、幸ひ彌次馬の眼にも觸れなかつたらしく、平次とガラツ八が、勇太郎を追つ立てるやうにして行つた時は、何も彼も勇太郎が發見した時のまゝになつて居りました。

「こいつはひどい」

八五郎が思はず尻ごみしたのも無理はありません。染吉の死骸は縁臺の下に滑り落ちて居りますが、後ろから重い物で、頭を一と思ひに叩かれたらしく、よく剃つた月代から鬢へかけて、血潮に染んでこと切れてゐるのです。

「物も言はずに死んだことだらうな」

平次はさう言ひ乍ら死骸を引起して、いろ〳〵調べて居ります。

「何んで打つたんでせう」

ガラツ八は其邊を捜しましたが、兇器になるやうな石も棒も見當らず、反つて染吉の持物だつたらしい、贅澤な羅紗の紙入が見付かりました。

「中に何があるか見た上で、お前が預かつて置いてくれ」

平次は聲をかけました。

「何んにもありませんよ」

「抜かれたんだらう」

「これが目當ての泥棒ですかね」

「いや、そんなことぢやあるまいよ。泥棒ならこんな結構な煙草入を盗らずに行く筈はない」

平次は染吉の死骸から抜いた金唐革の恐ろしく金のかゝつたらしい煙草入を月の光りにすかしました。

「大變な品ですね」

「フーム、こんな物を持つのは、江戸でも名のある町人か大通、でなければ餘つぽど思ひあがつた人間だ。——おや、煙草入の中に小判が二枚入つてゐるよ」

平次は小判を月光りにすかして、ヒヨイと重さを引いて見ましたが、元の煙草入に納めて、自分の懐に入れました。その頃から唯ならぬ物の氣はひに驚いて、近所の衆や往來の彌次馬が、

次第に集まり、町役人なども驅けつけて來ます。

「それにしても贅澤な人間ですね」

ガラツ八は月の光や、次第に集まつて來る提灯の光りの中で、死骸を眺め乍ら、こんな遠慮のない事を言ふのでした。

見る蔭もない死に樣ですが、染吉といふのは餘つ程の洒落男だつたらしく、妙に金のかゝつた身の廻りや、身だしなみの良い小意氣な男つ振などを見ると、女で問題を起し兼ねない樣子です。

一と通り檢屍が濟んだのはもう亥刻近い頃、平次は紙入と煙草入だけを、二三日借りることにして、現場を引揚げました。

「八、ちよいと附き合つて見ないか」

「一杯やらかすんでせう、ヘツ、ヘツ」

「馬鹿だなア、附き合へつて言へば、飮むことだと思つてやがる。染吉殺しはまだ目鼻もつかないぢやないか。明日の天道樣の出る前に、もう少し當つて置き度いところがあるんだ」

「ヘツ、附き合ひますよ。——酒は御免を蒙るが、憚り乍ら御用と來た日にや、夜が明けたつて日が暮れたつて驚きやしません」

「急にいきり出すぢやないか、——飮み損ねて口惜しからうが、そんなに十手なんか突張らかさなくたつて宜いよ」

さう言ひ乍ら、平次が叩いたのは、妻戀坂の荒物屋の戸でした。

其處には六十を越した父親の周吉と、十九になつたばかりの娘のお芳と二人つ切り、夜更けに顔見知りの御用聞——錢形平次に飛込まれて、さすがに膽をつぶした様子です。

「これは親分様方」

周吉はあわてて引つかけたらしい半纏の前を合はせ乍ら、すつかりオドオドして居ります。後ろから行燈を持つて來たのは、さすがに晝のまゝの、身だしなみを崩さないお芳。十九といふにしては少しふけて、賢こさうな淺黒い顔、キリリとした眼鼻立は決して美しくはありませんが、何んか知ら一度見た者の記憶に燒きつく特徴を持つて居ります。

「染吉が殺されたんだが、知つて居るだらうな」

平次は短兵急でした。

「あの騒ぎですもの、よく知つて居りますよ。でも、年寄と若い女の見るやうなものぢやありませんから、お芳も外へは出しません」

周吉の調子には、年寄らしい用心深さがあります。

「染吉は今晩お芳と逢ふ約束だつたさうだな」

「そんな事が親分——」

あわてて辯解する父親の袖をそつと引いて、

「父さん、皆んな申上げた方が宜いでせう、——染吉さんは久し振りで逢つて話し度いことが

あるから、父さんには内證で、私に酉刻半頃（七時）お稲荷様まで來るやうにと、酒屋の小僧さんに頼んで傳言をよこしました」

お芳の顔はさすがに緊張に蒼くなります。

「行つたのか」

「ハイ、父さんの御機嫌がむづかしくて、家を出られないんで、少し遲れて行つて見ると」

「――」

「親分さん方が、染吉さんの死骸を調べてゐるところでした」

「その前は確かに出なかつたのか」

「出やしません。出しもしなかつたので、ヘエ」

周吉は頑固らしく口を入れます。

「染吉とお芳さんが、許婚だつたといふ噂があるが、本當かい」

「飛んでもない、親分。あんな道樂者のところへ、大事の娘をやるわけはありません。尤も昔はあんな男ぢやありませんでした。この私も娘をやる氣になつたこともありますが――」

「どうだいお芳さん」

平次は周吉に構はず、お芳に問ひ進みました。

「一年前、そんな話もありました。でも、近頃の染吉さんは――」

お芳の顔には、惱ましさが雲の如く湧きます。

「勇太郎は染吉と張り合つたんぢやないのか」
「あの人は正直で氣の良い人です。一時染吉さんと面白くない事があつても、それを根に持つやうな人ぢや御座いません」
お芳は寧ろ勇太郎に好意を持つて居るらしく、躍起となつて辯解します。

四

「親分、何んにもわかりませんよ。この上は勇太郎を縛つて、二三束叩いて見るんですね。江戸一番の正直者見たいな顏をして居るだけにあの男には臭いところがありますよ」
いろ〳〵の情報を集めさせにやつた八五郎は、翌る日の晝過ぎにフラリと歸つて來ました。
「そんなわけには行かないよ。本當に勇太郎が下手人なら、あんなにあわてる筈はない。それにあれだけの傷を拵へたんだから、下手人はうんと血を浴びる筈だ。勇太郎にはそんなものはなかつたぜ」
平次は落着き拂つて居ります。
「家へ歸つて着換へて來る術もありますよ」
「そんな落着いたことの出來る男ぢやない」
「でも、勇太郎の秤は見付かりましたよ、分銅にはうんと血が附いて――」

「何處で見付かつたんだ」
「町内の若い者が妻戀稻荷の後ろの藪で見付けたんで」
「秤と分銅と一緒になつて居たのか」
「秤の先へ分銅を縛つてあつたさうです」
「フーム」
「これだけでも、三輪の親分なんかの耳に入ると、勇太郎を縛りますよ」
「家へ歸つて着物を換へるほどの落着きがあるなら、分銅位は洗つて置けさうなものぢやないか。現場のすぐ近くへ、血の附いたまゝ捨てて行くのは、下手人は此秤の持主ではないと言つてゐるやうなものだ。勇太郎はそれほどの馬鹿ぢやあるまい」
「さうですかね」
平次の論理の前に、ガラツ八は小首を捻るばかりです。
「お芳はどうした」
「世間では何んとか言ふが、あの娘は人を殺すやうな人間ぢやありませんよ。染吉はお芳の生眞面目なのが嫌になつて、この一年ばかり前から、丸山町の直助のところへ入りびたつて、その妹のお辰といふのに夢中になつて居るが」
「丸山町の直助――聞いた事のない名だな」
「出來星の金持ですよ。米相場で儲けたとか言つて、大變な景氣で、その妹のお辰はまた、小

格子から引つこ抜いて來て、裝束を直したやうな恐ろしい女ですせ」
「いづれそいつは後で當つて見よう。ところで、俺の方は大變なものを見付けたよ」
「何んです、親分」
「これだ」
平次は昨夜染吉の死骸から持つて來た、金唐革の煙草入を出して、中から二枚の小判をつまみ上げます。
「小判がどうかしたんで」
「こいつは銅物だよ」
「えツ」
「近頃江戸中を騒がせてゐる銅脈さ。一寸見は眞物の小判と少しも違はない。——尤もこちとらは、滅多に小判を見ることもないが、——兩換屋へ持つて行つて、丁寧に見て貰ふと、こいつは良く出來てゐるが全くの贋物だ」
「ヘエ——」
「殺された染吉が、惡事から身を退いて、俺のところへ來ると言つて居たさうだな」
「勇太郎はそんな事を言ひましたね」
「その途中で殺されたのかも知れない。——ありさうな事だ。殺した奴は染吉の財布ばかり覗いた。その中の物を皆んな奪つたのは、小粒や、青錢まで欲しかつたわけぢやあるまい。下手

人は、染吉の持つて居るこの贋物の小判を奪るつもりだつたかも知れない」

「――」

飛躍する平次の天才、その推理の塔の積み重なるのを、八五郎は呆氣に取られて聽き入るばかりです。

「ところが、染吉は用心して、大事の小判を煙草入の中へ入れた。――羅紗の結構な紙入を持つてゐる人間が、腰にブラ下げる煙草入などに小判を入れる筈はない。その煙草入は三兩や五兩で買へるやうな品ぢやないんだから、不用心ばかりでなく煙草入もいたむ」

「――」

「八、こいつは面白くなつたぞ」

「何が面白いんで？　親分」

八五郎は四方をキヨロキヨロ見廻します。二月の陽は縁側にクワツと射して、貧しい平次の住居を隈なく照らし出しますが、別に八五郎の眼には、面白くなるやうなものもありません。

「染吉は贋金造りか、贋金遣ひの仲間を知つて居たのかも知れない。――縫箔屋を止してノラクラ者になつた染吉が、こんな贅澤な暮しをして居るところを見ると、どうかしたら、染吉もその贋金遣ひに關係を持つて居たのかも知れないよ」

「――」

「近頃何にかのわけがあつて、贋金遣ひの仲間が恐ろしくなり、自首して出て、自分の罪だけ

でも許して貰はうとして居る矢先、仲間の者に嗅ぎ付けられて、一と思ひに殺されたんぢやあるまいか。——俺にはどうもそんな匂ひがしてならない」

「——」

「染吉を殺した下手人は、餘つ程染吉と昵懇な奴だ。——染吉の後をつけて來て、妻戀稻荷で勇太郎と話すのを盜み聞きしたんだらう。染吉が自首するに違ひないと見て取つて、勇太郎の姿が見えなくなると直ぐ染吉のところへ姿を現はし、馴々しく話しかけ乍ら、勇太郎の忘れて行つた秤で力任せに毆つたんだらう。秤に分銅を縛つてあつたといふから、こいつは恐ろしい得物だ、手もなく寶山流の振り杖さ」

「——」

「そこへ勇太郎が歸つて來たので、秤を藪に投り込んで、下手人は逃げ出した、恐ろしい奴だ」

「誰でせう。その下手人は？」

「解らない。まるつ切り解らない。兎に角、染吉の繁々出入りする家を探すことだ」

「差當り丸山町の直助はどうです」

「行つて見よう。無駄かも知れないが」

平次とガラツ八は、其處から眞つ直ぐに、丸山町に飛んだことは言ふまでもありません。

五

丸山町の直助の家は、崖の上に建つた立派な家で、構へも木口も相當、後ろに竹林があつて、前には五六軒の長屋を並べ、その家賃だけでも呑氣に暮せさうな樣子です。

不意に訪ねると、幸ひ主人の直助も、妹のお辰も顏を揃へて居りました。直助は三十を越した、愛嬌のある好い男、少しばかり上方訛があるのも、上手な商賣人らしい印象を與へます。

「錢形の親分さんでしたか、それはどうもお見それ申しました。私は御當地へ參つてまだ三年と經ちませんので、土地の方にも馴染が薄う御座います。——染吉さんが殺されたさうで、ヘエ、ヘエ、人から聞かされてびつくりいたしました。私も湯島のお宅へ顏だけ出して參りましたが氣の毒なことで御座います。氣持の好い方でしたが、——近頃はよく此處へも見えました。現に昨日もおいでで、晝過ぎまで話して歸りましたが——」

さう言つた滑らかな調子。

染吉との關係は商賣のことから懇意になり親しく往來してゐるうちに、妹のお辰を嫁に欲しいといふ話になり、本人も大方承知してゐたが、具體的な話を進める前にあんな事になつて、お辰も力を落して居る——といふのです。

話の中に、妹のお辰も出て來ました。二十三の年增盛りで、お芳の野暮つたい樣子に比べると、お月樣と鼈ほどの違ひ。身の廻りの贅は兎も角、厚化粧で、媚澤山で、話をしてゐても愛嬌がこぼれさう。

「まア、本當に、染吉さんは、お可哀さうに。私はもう、死んでしまひ度いと思ひました」

そんな事を言ひ乍ら、涙を拭いたり、兄の直助の身の廻りの世話をしたり、所作澤山にして居るのです。

「昨夜は外へ出なかつたらうな」

平次は委細構はず調べを續けました。

「妹と二人、一杯飲んで、好きな小唄の稽古をして、早寢をしてしまひました。——尤も、私の出入りは必ず前のお長屋の中を通りますから、其邊で訊いて下さればよく解ります。外に道は御座いません」

さう言はれるとそれつ切りの事です。

それにしても調度の見事さ、暮しの豐かさ、此處の生暖かい空氣に包まれて居ると、平次も八五郎も何にかうつとりした心持になります。

「江戸には滅多に見られない家だが、ちよいと家の中を見せて貰へまいか」

「ヘエ、どうぞ、親分方が御覽になるやうな家ではございませんが」

直助は氣輕に立つて、平次と八五郎に家の中を見せてくれました。中は贅を盡して居りますが、至つて簡單で明るくて、贋金等を造る場所があらうとも思へず、そんなものを貯へて置く樣子もありません。

「二階は？」

「富士山の見えるのが自慢で御座いますが、あの通り孟宗竹が伸びて、折角の眺めを臺なしにしてしまひました。いづれ竹を切つて了ふつもりですが――」

指差すと、小石川一帶の町を眼下に眺めて、その上に富士も見える景色ですが、崖の竹林がひどく繁つて、すつかりその眺望を隱して居ります。

其處を出た平次とガラツ八は、前の長屋で一と通り直助兄妹のことを訊いて、それから湯島を廻つて、殺された染吉の家へ立寄り、線香を上げて樣子を見ました。集まつたのは近所の衆と、昔染吉の先代が使つた縫箔の職人だけ。耳の遠い婆さんと染吉とたつた二人の世帶は、主人が死ぬと火の消えた淋しさです。

近所でいろ〳〵噂を集めましたが、贅澤で人を人臭いとも思はない染吉には、相當に反感があり、突つ込んだことは誰も知りません。

「親分、下手人は誰でせう」

ガラツ八は到頭考へ草臥れました。

「まだ解らないよ」

「勇太郎ぢやなしお芳でないとすると、矢張り直助ぢやありませんか」

「どうして、そんな見當をつけたんだ。――直助は昨夜外へ出なかつたんだぜ」

「でも、あの男は油斷がなりませんよ」

「前の長屋で、直助兄姉は昨日の晝過ぎから外へ出ないと言つてるぢやないか。それも五人や

三人の口が揃つたのぢやない、——三味線と小唄も聽えて居たといふし」
「でも、變ぢやありませんか、親分」
「何が變なんだ」
「何んとなく變ですよ」
八五郎はキナ臭いものを嗅ぎ出すやうに鼻の穴を大きくしました。
「それは斯うさ、あの直助とお辰は、兄妹ぢやないんだ。俺には初めからよく判つた」
「ヘエ——」
平次の言葉は豫想外です。
「お前の眼にも變に映つたらしいが、兄妹でないと見破ることは出來なかつた。たゞ、兄といふ直助と、その妹といふお辰の取廻しが變に見えたんだ。——川柳にはうまいのがあるよ。『それでなくてあの所置振りがなるものか——』つてね。妹があんなに兄の世話が燒けるものか。吸ひ付け煙草などは兄妹の中ですることぢやないよ」
「すると」
「二人は夫婦さ」
「染吉がお辰に夢中になつたのは？」
「直助が承知で釣つたんだらう。——兎に角、あの男の稼業をもつとよく知り度い。氣の毒だが下つ引を四五人狩り出して、直助の身許と身上と商賣のことを、もつとよく調べ抜いてくれ」

「ヘエ」

ガラツ八は拳を放れた鷹の様に、何處ともなく飛んでしまひました。

六

それから三日目。

「大變ツ、親分」

「サア、來やがつた。何處で大變を拾つて來たんだ」

あわてて飛込んで來る八五郎を迎へて、平次は何やら期待にニヤリニヤリして居ります。

「三輪の親分が乘込んで來て、丸山町の直助の家を根氣よく家探ししましたぜ」

「何にか出たかい」

「何んにも出ないから不思議で、——出たのは眞物の小判が三百兩ばかり」

「それから」

「三輪の親分もすご〳〵と引揚げましたよ。床下も天井も剥し、井戸を覗いて庭まで掘つたが、口惜しさうでしたよ、三輪の親分の顏が」

「それつ切りか」

「それつ切りです。でも三輪の親分が目をつけるやうぢや油斷がなりませんね」

「お前の調べはどうだ」
「直助は米相場のコの字も知りませんよ。上方で儲けたやうな事を言つてゐるが、三年前江戸へ來た時は裸一貫で、それから何をするでもなく金が出來て、妹といふのを呼寄せてあの豪勢な暮しが始まつたさうで」
「フーム」
「あのお辰といふのは恐ろしい腕で、今まであの女に釣られて出入りした男が幾人あつたかわからないが、それが順々に來なくなつて、近頃は染吉ともう一人、中年者の男がちよい〳〵來るさうですよ」
「そんな事だらうよ」
「早くあの野郎を縛つて下さいよ、親分。三輪の親分に先手を打たれちや業腹ぢやありませんか」
ガラツ八は一生懸命に説き立てました。
「證據は一つもない。贋金が一つでもあの家にあれば縛れるが、——でなきや、あの晩、直助が外へ出たと判れば——」
「行つて見ませう、親分。此處で考へたつて何んにもなりませんよ」
「さうしようか」
平次は到頭出かけました。甚だ自信のない姿です。

丸山町へ行つて崖の下の方から見ると、直助の家は竹林の上に屋根だけ見せますが、竹林の中には人間の歩いた様子はなく、第一、竹林の外の枳殻垣は、見事に繁つて猫の子ももぐれさうにはありません。枳殻垣の外には椎の樹が二三本、それは近所の洗濯物の干場に利用されてあります。表へ廻ると、直助とお辰はけろりとして迎へました。

「度々御苦勞樣で――、二階から今日はよく富士が見えます。邪魔な竹の芯を止めて、よく眺めのきくやうにしました。どうぞ」

直助兄妹が先に立つて二階へ案内します。成程障子を開けると、庇に冠さるやうに繁つた竹を十本ばかり、楷の方二三間打つてしまつて、下枝は青々と殘したまゝ、その上から小石川の高臺も富士も見えるやうにしてあります。

「この通り良い眺めになりました」

直助は緣側から、彼方此方を指します。

「此間三輪の親分が來たさうだな」

「ヘエ――、家捜しには驚きました。何んにもあるわけは御座いませんが」

直助は酢つぱい顏をするのです。

その間にお辰は茶を入れて、厚切の羊羹とこぼれるばかりの愛嬌とを一緒に持つて來ました。

「親分さん、どうぞ」

品をつくつて七三に平次とガラツ八を眺めると、背筋をゾクツと無氣味なものが走ります。

「八、昨夜の風はひどかつたなア」
平次はいきなり不思議なことを言ひ出しました。
「ヘエ――」
「主人にお願ひしてあの先を切つた竹を二三本頂戴したい。風でひどく痛められたやうだから、――お前は近所の植木屋へ行つて、親方を引つ張つて來てくれ」
「ヘエー」
何が何やら、わけも解らずに立上がる八五郎、それを追つて、階子段のところで、平次は何やら囁きました。
やゝ暫らく、直助と平次の、氣まづい對立は續きます。一度下へ行つたお辰は、此時そつと登つて來て、直助の後ろに寄り添ひます。
下の方へは八五郎の手が廻つて、間もなく町内の植木屋が來た樣子。
「どの竹を切るんですか」
そんな大きな聲が聞えます。
「芯を止めた竹を切るんだ」
上から平次、
「いや、切つちやならねエ、主人の俺が不承知だ」
何時の間にやら脇差を左手に持つた直助は平次の横手から狙ひ寄つて居るではありませんか。

振り返ると梯子段の上には、雌猫の様なお辰が、これも匕首を逆手に不氣味な薄笑ひを浮べて立つて居ります。

「氣が付いたか、直助」

平次は平然として、十手も出しません。

「野郎ツ」

サツと切りかける直助、引外して、平次の手から、二三枚の投げ錢が飛びます。

「あツ」

と、たじろぐ直助。それを見ると、後ろからお辰は雌豹のやうに飛付きます。

爭ひは一瞬にして決しました。平次がお辰を膝の下に敷いた時、直助は二階の縁側から竹に飛び付いて、眞に猿のやうに、竹から竹を傳はつて枳殻垣を越え、椎の樹を滑降りて、下の往來に立つたのは、思ひも寄らぬ見事な體術です。

併し、直助にも違算がありました。往來へ飛降りる同時に、身體の備もきまらぬところへ、

「御用ツ」

何處に隱れてゐたか八五郎のガラツ八、一世一代の糞力を出して、むんずと組み付いたのです。

× × ×

植木屋の鋸に從つて切倒される竹からは、贋造の小判がゾロゾロと出て來ました。平次に睨

まれ、三輪の萬七に脅かされた直助は、手元に證據の僞小判を置く危險を覺りましたが、その時はもう持出す機會を失してしまつたので、二階からの眺望の爲と言ひ觸して、太い孟宗を十本あまりも途中から切り、上から鐵の棒で節を拔いて、大地に生えた儘の生竹に、實に八千兩といふ贋造小判を隱したのです。三輪の萬七はそれを見付け兼ねましたが、竹の切りやうの異常なのと、昨夜の風で、梢のない葉の少い竹が反つて吹き歪められてゐるのを見て、平次は咄嗟に僞小判の隱し場所を發見したのです。

直助兄妹が極刑に處せられ、その相棒で、小判を贋造して居た飾り屋の安といふのも捕はれて後

「今度はお前にもよく判るだらう、繪解きにも及ぶまい」

といふと、八五郎は、

「僞金の方はそれでわかるとして、直助が染吉殺しの下手人と解つたのは？」

と訊きました。

「お辰が直助の妹でないと判つた時から怪しいと思つたよ。それから、長屋の衆は三味線と小唄は聽いたが、それが直助やら、お辰やらはつきりした事は判らなかつた。——もう一つ、直助の腕と身體を見て、此男なら、竹から竹に傳はつて、枳殻垣が越せると思つたんだ。——染吉を殺したのは、極く懇意な男だ、勇太郎か直助の外にはない」

「——」

「お辰を囮に染吉を騙して僞金使ひの手先にしたが、段々うるさくなつて、變な樣子を見せたので、染吉は寢返る氣になつたんだらう。——夫婦者が何時までも兄妹の眞似は出來るものぢやない、今までもその手で散々使はれた上二三人は殺されたらしい」

「お芳は？」

「あの娘は勇太郎と一緒になるだらうよ、似合の夫婦ぢやないか。——儲けるより溜める方が早い——と言つたね、良いことを聽いたよ、俺も少し溜める氣にでもならうか。ハハ、ハツハツハツ、尤も贋金使いを縛つた褒美の金は、八五郎が貰ふことになつて居るよ。今度はバラ撒かずに溜めて置くが宜いぜ」

平次は女房のお靜を顧みて蟠りもなく笑ひました。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物全集第十七巻　權八の罪」同光社磯部書房
　　1953（昭和28）年10月10日発行
初出：「オール讀物」文藝春秋社
　　1943（昭和18）年2月号
※題名「銭形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：門田裕志
2015年12月13日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控
二枚の小判

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　野村胡堂
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/